

世界の成り立ちを考える建築 距離、予感、可能態

Architecture that Thinks the World's Origin, Distance, Permonition, Possibility

藤本壮介×田中純+柳澤田実

Sosuke Fujimoto × Jun Tanaka + Tami Yanagisawa

柳澤田実——今日は宜しくお願いいたします。私は今号の「SITE ZERO/ZERO SITE」で「病」が生み出した言説や建築などのさまざまにクリエーションを、改めて包括的に問い直してみたいと思っております。インタヴューにあたり、藤本さんのさまざまな文章を拝読させていただきました。藤本さんにとって最初の建築である「聖台病院 作業療法棟」(一九九〇)を制作された時の文章に、精神病棟というのは特殊な建築ではなく、「奇妙に普遍的なもの」だという認識に立たれているとありました。距離があるのに繋がっていると、家であると同時に都市であるというような精神病棟に求められる特徴は、むしろ建築それ自体が持つべき特徴であるという認識です。ここには、精神病院という心を少し病んでいる方々が住まうための場所が、建築のプロトタイプになりうるという藤本さんのお考えが表明されていると思います。こうした藤本さんの思想は、病んでいる人たちの世界経験が、人間の根本的な世界経験や自己の経験のプロトタイプだという認識を論じておられる中井久夫氏や木村敏氏の思想と類似しているように思われ、私は、その点を大変に興味深く感じています。さらに藤本さんの建築においては、こうした「病」に対する認識が、理論のうえだけではなく、具体的な形、あるいは姿となっており、実際に経験できるものとして表現されるわけです。「病」についての認識が、設計として、建築として具体化するそのプロセスに非常に興味がありまして、いろいろお話を伺えればと思っております次第です。

S Z——今号を構成するうえで、是非藤本さんにお訊きしようと思った二つの理由があります。すでに柳澤さんに触れていただきましたが、まず、藤本さんの建築家としてのデビューが北海道の聖台病院という精神科 神経科病院の作業療法棟の設計で、これが初めての作品であることを考えると、いわゆる若い建築家が住宅などのクライアントから依頼があって建築を始めるのはちょっと違うことだろうと伺えるんですね。作業療法棟ではおそらく作業療法士の指導で入院されている方々が社会参加 社会交流の基礎を体得するということなどが行なわれているのだと思います。そういう空間設計から建築の経験を始められた場合、この経験は藤本さんにとってある種の原型として今もあるのではないかと申し上げます。「住宅など」と言いましたが、藤本さんの作品を見ていて、あるいはもともと深いところにある空間の質に触れているのではないかと思ふことも多くあります。そういう意味では、病棟や看護寮というビルディングタイプに限らない、公共建築や住宅にも通底している建築理念のようなものがあるのではないかと思うんですね。そうしたことを今号のテーマに近づけることが可能であれば、藤本さんにとつての「病と住むこと」や「病と建築」などについてのお考えをお訊きしたいと思っております。

もうひとつは、これまでの藤本さんのお考えが掲載されている雑誌などを拝読しますと、秩序/無秩序、自然/人工、部分/全体、機能/自由など、対立する二項の間に発生する状態に大きな関心を持つていらっしゃることがわかります。ひとつめの関心に重なりますが、こういうことを語られる際にもほとんど「住宅を作る場合は」というような条件がありませんね。おそらくこのような思考や理念は



1——「聖台病院作業療法棟」撮影：藤本壮介